

令和7(2025)年度 商学・経済学研究科（博士後期課程）2月入試

試験科目名：外国語（商学分野）

① 出題の意図および評価のポイント

- ・ 博士課程での研究および博士論文を執筆するのに必要な英文の読解力を有しているのか、を確認するために和訳の問題を出題しました。
- ・ 評価のポイントとしては、試験時間内で、日本語による説明として適切な内容で記述されていることです。

② 解答例

はじめに

国際会計基準審議会(IASB)はロンドンに本部を置き、2001年に活動を開始した。IASBは、公共に利益のために、一般目的財務諸表において透明性と比較可能性を備えた情報の提供を求める、高品質でグローバルな単一の会計基準を作成することに尽力している。この目標達成のため、IASBは各国の会計基準主体と協力し、世界中の会計基準のコンバージェンスを実現している。14名のIASBメンバー（うち12名は常勤）は、幅広い専門的経歴を有し、世界各国との連携の責任を担っている。IASBは、国際会計基準委員会（IASC）財団によって選出、監督、資金援助を受けている。世界中の主要会計事務所、民間金融機関、事業会社、中央銀行、開発銀行、その他の国際機関および専門機関から財政支援を受けている。

評議員会

IASC財団の活動は、評議員会によって管理されている。評議員会は、IASBの委員、基準諮問委員会および国際財務報告解釈委員会の委員を任命する。評議員会はまた、IASBの有効性とデュー・プロセスの遵守状況を監視、IASBの資金調達を行い、IASBの予算を承認し、定款の変更についても責任を負う。

評議員会は、多様な地理的および職務上の経歴を持つ人々で構成されている。IASC財団の現行の定款では、評議員会は、北米から6名、欧州から6名、アジア太平洋地域から4名、そして地理的バランスが保たれる限り、その他の地域から3名が選出されるよう任命される。19名の評議員のうち5名は会計専門家を代表し、作成者、利用者、および学者からなる国際組織はそれぞれ1名の評議委員によって代表される。残り11名の評議委員会は、構成員による指名プロセスを通じて選出されなかった「一般選任」であった。既存の評議員会は、欠員補充のための後任の評議員選任においても同様の手続に従う。理事会は現在、5年毎に規定に基づき、定款の見直しを行っている。

令和7(2025)年度 商学・経済学研究科（博士後期課程）2月入試
試験科目名：外国語（経済分野）

① 出題の意図

本問題では、限界生産力の逡減といった経済学の基本概念を用いて、マルサスの人口論とその後の経済発展により人口転換点を迎えたという、人類史における人口動態の変化とその経済学的な背景を述べている。経済学に関連した標準的な英語力と、さらにその説明文に対応する理解の証としてグラフが描けるかを問う問題である。

② 解答または解答例

問1：人類の存在の対部分において、人類は絶え間ない生存競争にさらされてきた。生活水準の人口成長への正の効果（意識：生活水準の向上により人口は増加するという正の効果）とともに生じる労働の収穫逡減により、一人当たり所得は生存水準付近にとどまった。「住居と食料を巡る絶え間ない競争」（マルサス 1798, p.48）により、子育てのための資源は限られていた。技術環境や土地の利用可能性の向上は、人口の増加にはつながるが、より豊かになるわけではない。

問2：まず、Malthusian pattern とは、生産技術の向上や開墾が行われ、一人当たりでいったん豊かになったとしても、その後、人口が増加するため、一人当たり所得水準は以前と変わらない状態（絶え間ない生存競争）に戻る、というものである。この問

いでは逆に黒死病のように、人口が一時的に減少した場合どうなるか、ということを知っている。

解答例「人口の一時的な減少により、一人当たりの実質賃金（所得）は上昇する（例えば収穫量が以前と変わらないとすれば、人口減少により一人当たりの食料は増加する）。すると、一時的に豊かになるため、それにより人口増加が加速する。最終的に実質賃金は以前の水準にまで低下していく。」

問3：直前の段落から、成長過程を補完する特性をもつ個人（高い収入を得て、子供の教育（子供の質）に力を注ぐ個人。これに対して、成長過程を補完しない特性を持つ個人は、いったん所得が上昇しても子供の数を増やそうとする）が人口構成の多くを占めるようになるまでは、技術進歩と教育のフィードバックが生じず、技術進歩が生じ、いったん所得が高まっても（子供の教育にあてず）子供の数を増やす方向に働く。これにより、産業革命以前の技術進歩のうねりは持続的な経済成長、つまり持続的な所得の成長につながらなかった。

問4：本文の記述を踏まえ、Figure I のグラフを図示せよ。

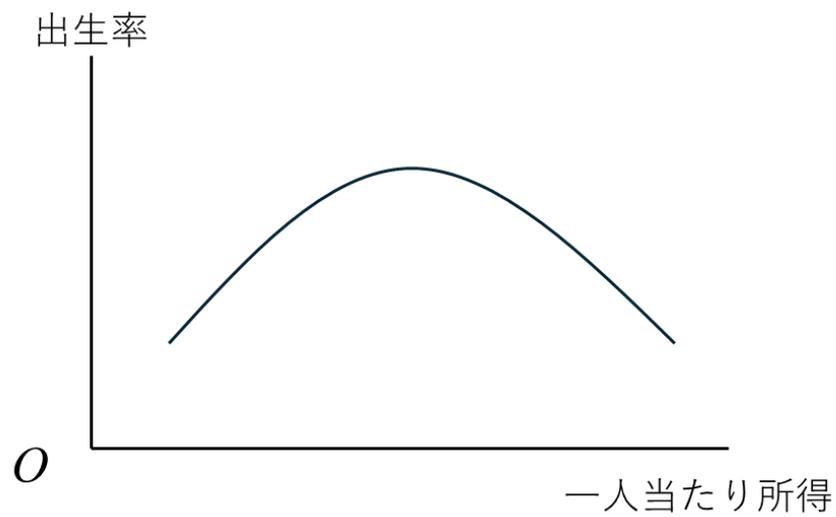
著作権の権利上、掲載できません。

FIGURE I
Output per Capita in Western Europe in the Years 0–2000
Data source: Maddison [2001].

コメント：As depicted in Figure I, 以降では「マルサスレジームからのヨーロッパの離陸は産業革命と関連していた。1820年から1870年の期間における西ヨーロッパの一人当たり生産高の平均成長率は、教育の目覚ましい増加とともに年率1.0パーセントにまで上昇した。(中略)技術進歩の加速は人的資本の蓄積を刺激し、(中略)20世紀で一人当たりの年間平均所得が約2パーセント増加する持続的な経済成長の時代への道を切り開いた。」とある。このことから、19世紀中葉を境に一人当たりGDPが大きく増加するようなグラフを描けていれば良い。その際、縦軸の数値にはこだわらない。いわゆる「アイスホッケーのスティック」の形状が描けているかが重要。

問5：下線部④に関して、1人当たり所得と出生率の関係を図示せよ。グラフの

作成においては、横軸を「1人当たり所得」、縦軸を「出生率」とすること。



コメント：人口動態の転換点（山型のグラフ）が描けていれば正解とする。